

フェローシップ・ニュース NO.28号

マイアミ・ドラッグ・コート ロジネック判事 来日講演より

事務局長 尾田真言

平成20年3月8日と10日の両日、龍谷大学矯正・保護研究センター主催の「薬物依存症への新たな挑戦～日本版ドラッグ・コートの可能性」と題する国際シンポジウムが、アパリの協賛により開催され、8日の東京会場は約70名、10日の京都会場には約100名の方が聴講においでいただきました。講演の内容については、今後発刊予定の龍谷大学の出版物に掲載予定ですので、本稿では、5つの質問に対する回答を中心に基調講演をしていただいたロジネック判事の話をお伝えします。



初めて来日したロジネック判事



ロジネック判事を囲んで（東京会場）

Q.1 マイアミではどのような経緯でドラッグ・コートが創設されたのでしょうか？

1980年代、マイアミ・デイド郡ドラッグ・コート設立にあたり、いくつかの出来事があった。そのひとつが、80年代前半、12万人のキューバ人が難民となってマイアミに避難した。当時のキューバのフィデル・カストロ大統領が、刑務所(jail)や精神病施設を開放したため、キューバ難民の15%がこういった受刑者、入院患者であったと推定される。

マイアミの治安は一気に悪化し、コカインのアメリカ国内への代表的密輸港となってしまった。そして、犯罪増加(特に薬物使用と密売)の結果、刑務所の過剰拘禁現象が起こり、裁判所は刑務所からの早期釈放を命令する事態に陥ってしまった。この事態と、中流家庭の若者の薬物犯罪の逮捕が増加したことから、刑務所に代わる制度への需要が高まっていった。

第11巡回裁判所(フロリダ)の首席判事は、1年近く、薬物依存症の回復を支援する全米の施設等を調査し、地域機関の協力により、刑務所の代替策として、薬物依存症治療を刑事司法制度の中で裁判官の監督の下に行うドラッグ・コートをマイアミで1989年に創設させた。

Q.2 ドラッグ・コートが創設される前は、薬物所持事犯者に対してどのような刑罰が科せられていたのでしょうか？ その刑罰の種類、期間等、教えてください。

違法な薬物所持に関する法定刑はフロリダ州法に定められている。20グラム以下のマリファナの所持は刑務所への1年以下の拘禁刑。20グラム以上の所持、及び他の違法な薬物の所持(たとえばコカイン、ヘロインなど)は重罪として、州刑務所への5年以下の拘禁刑が規定されていたが、通常は、長期の実刑は科せられていなかった。ドラッグ・コートの設立前は、一般的には、薬物所持の初犯者は、地域社会へ貢献していると認められた場合は、逮捕から釈放までの身柄拘束期間は1～2日であった。量刑はフロリダ州法の範囲内で裁判官の裁量に委ねられていた。

2回目の者には通常30日から60日の実刑が科せられた。

3回目の者には通常4ヶ月のTASC(Treatment Alternative to Street Crime)と呼ばれる収容施設への拘禁と保護観察が言い渡された。

Q.3 ドラッグ・コートでの裁判はどのような手続きで行われていますか？

フロリダ州法は、営利目的事犯以外の薬物の所持や購入事犯に対し、初犯者にはドラッグ・コートへの参加資格を与え、最低一年間の回復プログラムを無事終了出来た場合、裁判所による公訴棄却、あるいは、検察官により不起訴となる(ちなみに、フロリダ州法には、違法薬物の使用罪は規定がない)。

この法律は1990年代中盤に施行された。そして5年前からは、処方箋の不正入手による薬物事犯に対しても、ドラッグ・コートへの参加を認めるようになった。

特定非営利活動法人
アジア太平洋地域アディクション研究所

発行日
2008年5月1日

APARIとは、アジア太平洋地域アディクション研究所(Asia-Pacific Addiction Research Institute)の略称です。

全国のDARCやMACの各施設、福祉・教育・医療・司法関係者と連携しながら、依存症から回復しようとする方々を支援しているシンクタンクです。

目次：

ロジネック判事来日講演より…尾田真言	1 2
薬物依存症と家族の対応について(5)…町田政明	3
サンフランシスコ退役軍人病院の治療プログラム…小田晶彦	4 5
入寮者からのメッセージ…ショウ	6
藤岡ニュース!…施設長 山本大 アパリ会員募集中! 日本ダルク公開シンポジウム開催!	7
アパリからのお知らせ	8



最高裁判所の前で（東京）

マイアミ・ドラッグ・コートはフロリダ州法より先に存在していたので、ドラッグ・コートに関する規定には若干相違が見られる。ここでは、卒業のための最低条件は「2-2-2」と呼ばれ、つまり、週2回のカウンセリングに出席すること（グループまたは個人）、72時間の間隔を置いた週2回の尿検査、そして週2回の12ステップ・ミーティング（NA、AAなど）、12ステップが合わない人のためのミーティング（RR=Rational Recovery）への参加に加え、定期的な出廷である。

その他の参加条件・手続は以下のとおりである。

1. 窃盗など非暴力犯罪の被告人で薬物またはアルコール依存の問題を抱えている者も、マイアミ・デイド郡のドラッグ・コートに参加できる。この方針は、州検事とマイアミ・デイド郡の公設弁護人の同意の下、第11巡回裁判所首席判事の行政命令により、決定された。
2. 州法とは異なり、非暴力犯罪の前科2犯の者も、ドラッグ・コートへの参加資格がある。しかし、初犯と違い、この者は、ドラッグ・コートを無事終了した後でも、公訴棄却とはならず、起訴されるが有罪判決の宣告猶予を受け、フロリダ州法の下では、有罪判決が言い渡されない。
3. この卒業生で、再逮捕された者は、再度1年間のプログラムに参加できる。無事終了すれば、公訴棄却となる。
4. 前科3犯以上の者は、参加できない。
5. プログラム全過程を終了した者は、トリートメント・プログラムの推薦を受け、卒業できる。

Q.4 薬物依存症回復プログラムをどのように開発しているのか？

どのようにして治療機関（treatment provider）と契約しているのか？

1989年にマイアミ・ドラッグ・コートが設立された時、デイド郡（現在はマイアミ・デイド郡）はマイアミ・ドラッグ・コート専用の通所型の外来トリートメント・プログラムを作った。当時は、ドラッグ・コートの被告人は全員この「ドラッグ・アンド・トリートメント・プログラム」（DATP）を受講した。このプログラムには3つの段階（解毒期、安定期、アフターケア期）があった。

1999年以来、治療機関のネットワークを広げ、営利企業としての治療機関も、非営利目的の治療機関も、続々とマイアミ・ドラッグ・コートからクライアントの受け入れを希望した。現在に至っては、郡によるDATPの他に、30以上の民間治療機関がある。

ドラッグ・コートの協力の下で作成されたプログラムはDATPプログラムだけである。ほとんどの場合、ドラッグ・コート設立後にできたプログラムは、「需要と供給」から生じたものである。最低基準としてドラッグ・コートは「2-2-2」の規定を定めているが、時間、場所、費用などはそれぞれの治療機関が設定する。もちろん、費用に関しては、ドラッグ・コートが民間プログラムにクライアントを送る際には、価格が良心的であることを確認している。

Q.5 尿検査で陽性反応が出た場合はどうするのですか？

尿検査の結果が陽性であった場合、制裁（sanction）が課される。しかし、クライアントがいつからプログラムに参加したのか、クライアントが裁判所に対して正直であったのかとすることが加味され、制裁の程度は異なる。すべての制裁はできる限り速やかに課せられるべきである。

制裁の特徴として次のものが挙げられる。

1. プログラムに参加してから30日以内に再使用し、薬物の使用をやめなかった被告人は、裁判官の面前に出廷させられる。こういった被告人はさらに頻繁に出廷させられ、場合によっては12ステップ・ミーティングにも出席させられる。
2. 30日以上断薬状態から再使用した被告人は「何が私を再使用に走らせたか」と題した作文を提出させられるとともに、回復プログラムの中の再発予防に関する個人カウンセリングを受けさせられる。
3. プログラムに通うのをやめてしまった後出廷し、尿検査が陽性であった被告人は、その晩は刑務所に収容され、翌日、再発予防のためのカウンセリング・プログラムに参加させられる。
4. 薬物使用を続ける被告人は2週間刑務所に収容され、通所型プログラムから入寮型プログラムへ変更させられる可能性がある。
5. あらゆる制裁を加えた後に、それでも違法な薬物やアルコールの使用を続ける被告人に課せられる最大で最後の制裁は、ドラッグ・コートからの追放と、通常の裁判手続へ送致されることである。



講演の様子（東京会場）



懇親会にて記念写真（京都会場）

家族のための連続講座

薬物依存症と家族の対応について(5)

「いざという時の対応～ピンチがチャンス～」

カウンセラー 町田政明

「いざという時、問題が起こった時こそチャンスである」多くの家族はあんな問題が起きたら、こんな問題が起きたらどうしようという心配や恐れから問題を回避しようとし、いざという時のチャンスを生かせません。いざという時や問題の時をチャンスにする為に、以下に例を出しながら具体的にどうするか対応を考えていきたいと思ひます。

逮捕された時

薬物は所持・使用すること自体が違法であり、薬物依存症の本人が逮捕されることはよく

あります。家族はあたふたしてどうして良いか分からないと思いますが、逮捕されたその時ほど回復の働きかけをする大きなチャンスはないと思います。すぐにアパリに連絡を取り、勾留中から本人の治療を働きかけるのが良いと思います。なぜなら時間が経つと本人は薬物の問題を忘れてしまうのです。拘置所の中でもう2ヶ月止めているから大丈夫だと思うようになり、アドバイスや人の話を聞けなくなるからです。

一度目はだいたい執行猶予の判決を取ることができるので、家族は執行猶予になっても本人を引き受けず、帰る場所を作らないようにします。それがイヤイヤでもアパリやダルクに入所するチャンスになります。イヤイヤ入っても毎日ミーティングに出るうちに、だんだんと自分の病気を受け入れるようになります。

失踪した時

本人が失踪した時、家族は何とか探し出して連れ戻そうとしますが、連れ戻しても治療につながることはほとんどありません。ですから捜索願いを出しても無駄です。本人からお手上げ状態になり家に帰って来るようにしないといけないのです。本人がわらをも掴む気持ちで家に帰った時こそ、はじめて私たちの話に耳を傾けるのです。その時に治療に結び付けるチャンスです。

白い粉が見つかった時

警察に通報するべきかそれとも本人を追及するべきか？家族は悩み苦しむと思います。警察に通報した場合、家族が大変苦しんで罪悪感にさいなまれている場合もありますが、回復施設に繋がって良かったと思っている家族もあります。何が正解かという答えはないと思います。通報して回復に繋がれば良いのですが、本人と長い関係を見ると恨みとして残っていく場合もあります。私は本人が普通に生活をしている場合は、無理に警察に突き出さなくても良いかと思います。時間はかかるかもしれませんが、具合が悪くなったり逮捕されたりいざ問題が起きてくると思います。普段どおり薬物の事は一切話さず、問題の時をじっくり待ったらどうでしょうか。

借金が発覚した時

借金のある場合、返してしまう家族が多くあります。家族が保証人になっていなければ、借金はいくらあっても心配はいりません。むしろ借金で首が回らなくなる方が、本人の底つきは近いかもしれません。家族は借金の正しい知識と対応をしてもらいたいと思います。依存症の治療を先にしないといくら借金を返しても、また同じ事を繰り返すだけですので、絶対に家族は借金を返さないのが鉄則です。

何かわけの分からないことを言っている時

薬物依存症の人は、何かわけの分からないことを言ったりします。それは薬の影響があると思われれます。薬の影響で幻覚幻聴が出ている場合や被害妄想が強くなる場合があります。覚せい剤ではよく誰かに追われているとか誰かに見られているとか言い出して、家に閉じこもる場合が見られます。そのような症状が出たら早めに本人を医療機関に連れて行くのが良いと思いますが、なかなか本人が承知しない場合が多いかもしれません。そのうちに本人も苦しくなると思いますが、少し様子を見て医療につなげるように考えたらいかがでしょうか。また、自分を傷つけたり人を傷つける心配がある場合は、県の精神保健センターに相談して、医療にかかるようにしてください。そのような場合は強制的に入院させる必要があります。

大事なことは

以上のことは参考になれば良いと思います。けれども本人の状態や症状や様々なケースにより、ここで記述したこととは違う対応が必要なこともあります。

困ったときに思い込みや一人で勝手な判断をせず、アパリなど専門機関に相談してください。また何が回復のチャンスか、どんなSOSが出てくるかは、人によって違います。家族は日頃から家族教室や個別相談や自助グループなどで、薬物依存症の知識を学び続けることが大切です。すると本人に振り回されなくなります。そして何かがあった時、本人のSOSを待てるくらいの気持ちの余裕ができてきたり、心の準備ができて安心と思います。そうするとこちらが主導権を握るようになれるので、本人に振り回されなくなります。

家族に必要なことは、本人の問題にばかり目が行き、不安や恐れを強めたり、又は世間や常識ばかりに目がいて、本人の問題行動を避けようとするのではなくて、その問題をチャンスに結びつけるようにすることです。問題こそ回復につなげるチャンスです。

そして、本人に左右されず、自分自身を取り戻すことです。



絶賛発売中！！

アパリ理事・石塚、尾田、嶋根が執筆しています。本書は、従来刑罰しかなかった薬物事犯者対策に薬物依存症治療を導入したドラッグ・コート制度を日本でも創設しようと提案する日本で初めての書物です。

「日本版ドラッグ・コート」
定価：2,625円（税込）
発行：日本評論社
最寄りの書店でお買い求めください！

家族の体験記 好評発売中！！

ギャンブル依存症に悩む
家族の物語
～絶望から希望へ～

この本には、ギャンブル依存症で悩む8人の家族の体験が綴られています。これは真実の物語です。家族の貴重な体験を知ることができる貴重な一冊です。

定価：1,000円
発行：ホープヒル
（アパリで販売中）

サンフランシスコ退役軍人病院の治療プログラム - ベトナム戦争帰還兵の戦後 -

独立行政法人国立病院機構 下総精神医療センター
精神科医長 小田晶彦

平成20年3月19日、イラク戦争開戦5周年を迎えサンフランシスコ市では定例の反戦デモが行われました。平日にも関わらず多数の市民が集まり、市内一の目抜き通りであるマーケットストリートでデモ行進し、市庁舎前の公園で集会を行いました。集会にはおよそ7000人の人が集まったそうです。アメリカ合衆国の中では特に進歩的で、自由と人権を重んじる人が集まっているサンフランシスコ市では、開戦当初から多くの市民が反戦を訴えていました。2003年の開戦当初の3日間では、戦争に反対する人が何万人も集まり、およそ2150人の逮捕者が出たそうです。ブッシュ大統領はいまだに戦争の正当性を主張していますが、アメリカ合衆国の世論は大きく反戦に傾いています。わたしの周囲でも、イラク戦争が誤りだったと考える人がほとんどです。ヒッピーの発祥地であるヘイトストリートの土産物屋には、なんとブッシュ大統領の顔をプリントしたトイレットペーパーが売られていました。さすがに悪趣味なので買いませんでしたが・・・。

一方イラクやアフガニスタンから帰還した兵士が受けた精神的なダメージも大きな問題になりつつあります。帰還兵の30～40%がうつ病、外傷後ストレス障害（Posttraumatic Stress Disorder, PTSD）、不安障害などの精神的な問題を抱え、同時にアルコールや薬物に依存する者もたくさんみられます。これらの人たちの中には地域社会に溶け込むことができず、職を失い、家族から見放され、ホームレスになる人もたくさんいます。これは第2次大戦以降多くの戦争を体験したアメリカ合衆国にとって深刻な問題です。サンフランシスコ市だけでも2500人以上もの帰還兵のホームレスがいると言われていています。このような帰還兵の精神的な問題に精力的に取り組んできたのが退役軍人病院です。

サンフランシスコ市の中心部から北西に10kmほど離れた小高い丘の上に退役軍人病院があります。歩いて15分ほど離れたところにリージョン・オブ・オナー美術館という美しい白亜の建物があります。また太平洋を見下ろす丘の上には幕末にサンフランシスコを訪れた咸臨丸の記念碑があります。晴れた日はすいこまれるような青い空の下に太平洋が広がり、遠くにゴールデンゲートブリッジを臨む風光明媚な場所です。わたしが留学しているカリフォルニア州立大学サンフランシスコ校（UCSF）精神医学教室が医局員の臨床実習をこの病院で行っており、わたしもアルコール薬物依存の実習に参加しています。今回はその治療プログラムについて報告したいと思います。

退役軍人病院の患者さんの多くは第2次大戦や朝鮮戦争を経験した70歳～90歳くらいまでの男性と、50～60歳代のベトナム戦争世代です。また全体の中では少数ですが、アフガニスタンやイラクからの帰還兵も少しずつ増えています。まだ若いのに歩行器や車椅子を使っている人を多く見かけます。また手首から先が映画に出てくる海賊のような鉤爪になっている人もみかけます。帰還兵の多くは戦場での悲惨な体験から、PTSDになっています。戦場での記憶が日常のささいな刺激（飛行機の爆音、人がたくさん集まる場所、突然肩を叩かれるなど）によって思い出されて来て止めることができなかつたり、悪夢の中に出てきたりします。中にはタイムスリップしたかのように、過去の記憶の中に入ってしまう、目の前にベトナムのジャングルが広がっているように見えたり、銃撃戦の中にいるような幻覚が見えたりします。ベトナム戦争当時はアメリカ合衆国では反戦運動がさかんで、一部の人は帰還兵を「人殺し」と言って罵りました。実際に非戦闘員に対する虐殺に関わった者はその体験を誰にも話すことができず、アルコールや薬物で精神を麻痺させることによって切り抜けてきたのです。ベトナム戦争が終わって30年にもなりますが、これらの兵士の間ではまだ戦争は続いています。

サンフランシスコ市の退役軍人病院精神科には、アルコール薬物依存治療チームとPTSD治療チームがあり、密接に連携を取りながら治療に当たっています。アルコール薬物依存治療チームの患者さんは、直接病院を訪れるか、市内の中心部にある退役軍人専門クリニックなどから紹介されてきます。治療は外来プログラムで「アルコール薬物乱用デイホスピタル（Substance Abuse Day Hospital, SADH）」と呼ばれています。これはアルコールや薬物の最終使用から30日以上経っていない者を対象としたプログラムです。月曜から金曜まで、朝9時から夕方4時まで行われています。だいたい45分のプログラムが終わると15分休憩が入り、間に昼食をはさんで1日に5つか6つのプログラムに参加します。内容は、再発予防、怒りのコントロールなどをテーマとしたグループセラピーと、作業療法、レクリエーション療法、12ステップミーティングなどです。また夜間、休日には市内の12ステップミーティングにも参加するように勧められています。酒気検査は毎日行われます。尿中の薬物検出検査は週1回です。



咸臨丸入港百年記念碑。遠くにゴールデンゲートブリッジが見える。



サンフランシスコ市の国立共同墓地。1万5千人以上の退役軍人がここに埋葬されている。



19世紀半ばに建てられた要塞。現在は博物館になっており、昔の銃、大砲、軍服などが展示されている。背景はゴールデンゲートブリッジ。

スリップ（再使用）は2回までは見逃されますが、プログラムの終了は遅れることとなります。3回以上になると市内のクリニックに戻されるか、解毒専用の施設に入寮することを勧められます。患者さん同士やスタッフへの人種差別的な言動やセクシャルハラスメントには大変厳しく、きちんと謝罪しなければプログラムから外されます。順調にすすめばプログラムは2週間で終了です。その後は退役軍人病院が管理する入寮施設に入るか、さらに進んだ内容の外来プログラムに進みます。これらの外来プログラムに長く参加した者は、病院内の清掃やクリーニング、患者さんのエスコートなどの仕事に就くことができるようになります。

SADHの患者さんの大半は50歳代以上のベトナム戦争帰還兵で、近年のイラクやアフガニスタンからの帰還兵は少数です。参加者は常時12,3人ほどでほとんどが男性です¹⁾。毎日のように1,2人新しい患者さんが加わります。患者さんの多くがアルコール依存症で、ヘロインやコカイン、覚せい剤などの違法薬物乱用者はむしろ少数です。また飲酒運転やアルコール酩酊下での家庭内暴力（Domestic Violence, DV）を犯した者が、裁判所の指示でプログラムに参加したりしています。日本の米軍基地に配備された経験がある人も多く、休憩時間に日本語で話しかけて来たりします。比較的親日的な人が多いようです。ちなみに韓国系アメリカ人の研修医は、第2次大戦や朝鮮戦争からの帰還兵ばかりを集めた別の治療グループで患者さんから「日本人か？」と聞かれたそうです。真珠湾攻撃を経験した人やフィリピンの「バターン死の行進」²⁾の生存者がいて、日本人に接すると当時の記憶が蘇ってしまうようです。

SADHでは主にマニュアルを使ってセラピーが行われており、個々の内面的な問題に踏み込むのは次の段階に進んでからになります。ここでは家族や友人、恋人との関係や住居のことなど現在の問題について自由な雰囲気の中で話しあわれます。戦場でのトラウマが大きい人は、PTSDとアルコール薬物依存の合併患者さんを専門に診る治療チーム（Substance Use and PTSD, SUPT）に紹介されます。

SUPTは治療にかかり始めてからの年数によりいくつかのグループに分かれます。治療開始後3年以内の「フェーズ1」グループと、5～6年の「フェーズ2」グループ、10年以上になる「フェーズ3」グループの3つに分けられます。

わたしは「フェーズ2」グループのグループカウンセリングに加えてもらっています。「フェーズ2」グループは毎週水曜日の午前9時から10時半まで行われています。メンバーはだいたい7～8人くらいで全員がベトナム戦争からの帰還兵です。全員が男性で半数が白人、残りがアフリカ系アメリカ人です。ほとんどがアルコール依存症者で、コカイン依存症を合併している者も何人かいます。依存症の方はほぼ安定しており、何年も断酒・断薬を続けている人がほとんどです。このグループは5年前から始まっていますが、メンバーの入れ替わりはほとんどありません。まず全員で自己紹介をします。名前、従軍した期間、依存した物質の種類、断酒・断薬期間そして今日特別にみんなに話したいことがあるかどうかなどを話します。取り上げられる話題は身体の病気のこと、家族のこと、将来の不安などです。話し合いは概ね穏やかに行われますが、時には感情が爆発することもあります。先日、参加者のうちの2名が、亡くなった戦友の追悼集会に参加するために途中で帰宅することになりました。戦友の思い出をいくらか語ってから退室したのですが、その後残ったメンバーが、自分は死にまつわる話しは聞きたくない、なぜあんな話しをさせるんだと司会のカウンセラーに食ってかかりました。自分は死については誰よりも良く知っている、いまさら学ぶことなどないと言うのです。話すうちにどんどん興奮してきて、立ち上がって怒鳴り始め、他のメンバーも何人か同調したため騒然としてしまいました。結局十分意見の統一ができないままグループカウンセリングは終わってしまいました。彼らの中には、戦闘中に一般市民も巻き込んで殺してしまった者や自分に撃たれた敵兵が血を流しながら絶命していくようすを見た者がいて、死に関することでは本当に些細なことでも刺激になってしまうのです。帰国してからも怒りの感情をコントロールすることができず、グループの全員が暴行などで刑務所に入った経験があります。兵士は怒りの感情をかきたてることによって戦意を高揚させるよう訓練されており、また実際の戦場で怒りを暴力という形で発散させた経験があるので、平和な社会で怒りをコントロールすることが困難なのです。症状の改善には時間がかかります。戦後何十年と経過してもまだ戦場での体験のフラッシュバックがあったり、悪夢を見たりします。最近も患者さんの一人が交通事故で車に追突されましたが、そのショックでフラッシュバックになり、杖を取って走行中のバスの前に立ちふさがり、機関銃を乱射するような動作をしました。戦場での体験が長期にわたる深い傷を心に残すことがわかります。わたし自身は帰国後帰還兵のPTSDの治療を受け持つことはないと思いますが、アルコールや薬物に依存する人の内面により注意深く接していこうと思っています。



平成20年4月9日にサンフランシスコ市で行われた聖火リレーに集まった群衆。チベット弾圧に対する抗議行動が大々的に行われた。



ゴールデンゲートパークでドラムを演奏する人々。周囲には大麻を使用している人もおり、ヒッピー・オン・ザ・ヒルと呼ばれている。

1) ベトナム戦争当時はまだ女性兵士は実際の戦闘に加わらなかったため、トラウマも少ないと考えられていた。しかし最近になって多くの女性兵士が軍隊内で上司や同僚兵士から性的虐待を受けていたことが明らかになり、新たなPTSDの問題として浮上してきている。

2) バターン死の行進
太平洋戦争中の1942年フィリピンで日本軍は大量のアメリカ兵及びフィリピン兵捕虜、民間人を十分な食料や水を与えずに徒歩で移動させ、結果として多くの死者を出した。その後アメリカ合衆国側は日本の残虐行為として宣伝し、国民の反日感情を掻き立てた。当時日本軍にはトラックなどの輸送手段がなく、日本軍将兵も徒歩で歩いたことから捕虜虐待には当たらないという見方もある。

アウェイクニングハウス 入寮者からのメッセージ

ショウ

アパリ発行
「Born・Again (ボーン・アゲイン)」
体験談 販売中!

2005年5月に第2版が発売になりました。体験談が13人分収められています。アパリではこの本を拘置所や刑務所にいる人への差し入れ用として使っています。

定価：1,500円
(会員価格:1,000円)

お申込はメールかファックスで
FAX：03-5830-1791
メール：info@apari.jp
ご住所、お名前、お電話番号をご記入の上お申込下さい。

「薬物依存」
DVD販売中!

アパリが作成したDVDで本人の体験談や、近藤恒夫の話が約30分間収められています。学校での薬物乱用防止教育、行政の職員の研修で利用されています。

1枚 3,000円

FAX：03-5830-1791
メール：info@apari.jp

ご希望の方はご住所、お名前、電話番号をご

僕が薬物依存者になるのにそんなに長い時間はかかりませんでした。

僕も薬物を使用し始めるまでは「薬物を使ったら薬が止められなくなりそのうち廃人になってしまう」と言う考えがありましたが、その考えはある日クラブのパーティーで友人に手渡された1錠のエクスタシーを好奇心で飲んだことであっさり崩れていきました。

その日から頭の中は薬のことだけになり、薬の種類もコカイン、覚醒剤、処方薬と増えていき一週間に一度は洗車するほど大事にしていた愛車もほこりまみれになっていきそのうち売り払いました。仕事もクビになりお金は全て薬を買う為に使い、着ている服はいつも同じになりました。そこまでボロボロになっても自分はもうどうにもならないところまで来ていると気付かず薬物を正当化していました。その内薬物を買う為に盗みを繰り返すようになりました。

そして逮捕され、少年刑務所に収容されました。刑務所の中で薬が抜けていくにつれて、自分がいままでどれだけ狂っていた事をしてきたか、冷静に振り返る事が出来ましたが、出所後の身元引受人がダルクになっていることに抵抗を感じ「自分はそこまでひどくない」と言う高慢な心や、「本当にダルクはちゃんとした所なのか?」と言う不信感がありました。

刑務所を出所してダルクのスタッフの方が迎えに来てくれた時も、なぜこれからダルクに行かなければならないんだと刑務所からダルクに向かう車内で考えていました。

しかし、ダルクで生活していくにつれて、ダルクで行なっているプログラムに無駄なことはないことに気付きました。そしてなにより、僕の事を温かく迎えてくれた仲間と、薬をやめながら人間らしい生活を送れている事に喜びを感じています。ダルクの生活の中で新しく気付かされる事や、今まで薬に溺れていて忘れていた大切な事を思い出したりします。私は薬物依存者なので薬をやりたいと言ったら嘘になりますが、薬をやめ続ける事の大切さ、そして薬をやめないと「未来」がない事に気付きました。ここで初めて僕の心の中に「薬をやめたい」という心が生まれてきました。この様な感情が生まれてきたのは薬をやってから初めての事でした。そしてその様な感情が芽生えてから、これからどうするべきか、そして将来の事など考える様になりました。将来の事とは言っても僕は今まで刑務所で無理やり薬が止まっていて、今の施設に繋がってまだ2ヶ月ちょっとなので、その様な事を考えるのはまだ早いのですが、薬に溺れていた時の僕は、将来は金を貯めてインドにでも行って、薬三昧の生活を送ろうと考えていました。現実的な将来を考え始められただけでも、自分なりに大きな進歩だと思えます。未来のことなど分かりませんが、出来ることならば、薬の欲求を無くして行き、薬なしの生活をしてみたいです。おそらく、今まで薬の打ちすぎ、飲みすぎで倒れたり、病院に運ばれたり、常に大量に薬を使用していたので、ダルクに繋がらなければ僕は薬のやり過ぎで苦しんで死んでいたでしょう。ダルクに繋がれたのも、警察に捕まった時の弁護士さんが勧めてくださって、両親も僕がダルクに行くのに賛成してくれたので、ダルクに行くことになったのですが、最初は行くのは嫌だったダルクですが、今は繋げてくれた親に感謝しています。

それと今はダルクで役割のこと以外に古くなった部屋の修繕をしたり、池に金魚を放して世話をしたりしています。部屋の修繕では、ペンキを塗らせてもらったり、大工仕事を教えてもらったり、楽しいし勉強になります。金魚を池に放したときは何が悪いのか、金魚が次々死んでしまっていて悩みましたが、仲間からアドバイスをもらったりして、今は金魚は元気に泳いでいます。僕は金魚を飼うセンスがない様で、池は仲間の人が見てくれています。しかし、ロビーで飼っているメダカは頑張っているの最近は元気に泳いでいます。それ以外にも施設が山の中にあるので、春も近づいてきて、草木を眺めたり、山を散策したり、池に入れる草を探したりと、今までの僕では考えられないような事を行っています。

施設には犬がたくさんいるのですが、最近は僕になついで来てくれて、とてもかわいいです。ミーティングから帰ってきた時などは施設の入り口のところまで皆迎えに来てくれていて、僕は今まで猫ばかり飼っていましたが、犬もいいものだななどと思っています。そんなこんなでダルクで色々な小さい幸せというより本来人間が感じるべき、薬抜き普通の幸せをたくさん見つけ、思い出し、仲間と楽しく過ごしています。この様な人間らしい生活を続けていき、肉体的にも精神的にも回復して、薬をやる前の自分に戻れるよ

僕は高校を中退してから、現場工事、自動車整備工、パチンコ店店員などをやってきましたが、どの仕事も2～3年でやめてしまい、一つの仕事を、徹底してやり遂げたことがありません。先の事は分かりませんが、将来社会に出たならば一つの仕事を最後までやり遂げてみたいです。そしてもし出来ることならば、父の経営する印刷会社を手伝ってみたいです。そのためにもこれからも「今日一日」で頑張っていきたいです。

藤岡 ニュース!

こんにちは。日本ダルク アウェイクニングハウスの山本です。ようやく厳しい冬も終わり、山の上の桜も蕾が開き始めて、あと少しで満開を迎えそうです。最近藤岡では仲間たちが非常に積極的に動いています。それぞれの役割は勿論、施設のリフォームや畑を作ったり、みんなが自主的に行動しています。先ゆく仲間たちが新しい仲間たちを巻き込んで一緒に作業をし、皆が目標を持って取り組み、その事で施設自体も変わり、良い形で相乗効果を示していると思います。

さて、前回に屋上のアスファルト防水の献金のお願いをさせていただいたところ、たくさんの方々から温かいご支援をいただき、遂に全ての工事が完了致しました。これで雨漏りの心配をせずに生活できると共に、今まで滞っていた施設内のリフォームにより着工することが出来るようになりました。本当にありがとうございました。この紙面をお借りして、スタッフ一同よりお礼申し上げます。今後よりいっそう仲間たちが過ごしやすい施設を提供できるよう努力して行きたいと思っております。これからも私たち日本ダルク アウェイクニングハウスの活動にご賛同いただけますようお願い申し上げます。

平成20年4月吉日 日本ダルク アウェイクニングハウス
ディレクター 山本 大

< 献金をいただいた方 >

安富良和様、小山久須美様、深野圭介様、佐久間清子様、加藤ちえみ様、更生保護女性会沼田支部の皆様、大堀美根子様、山森紀美子様、早川昭宣様、楠本慶子様、伊藤忠義様、那須隆信様、神原喜代子様、設楽あづさ様、都筑義明様、匿名の皆様 (順不同)

< 献品をいただいた方 >

安富良和様



4/23マック・ダルクソフトボール大会にてアウェイクニングハウス(藤岡)の仲間と日本ダルク(上野)の仲間たち



施設の中でペンキを塗っているところ

会員募集中!

平成20年4月より新規会員(正会員・賛助会員)を募集します。ご入会していただいた方には、会報「フェローシップ・ニュース」を毎号お届けします。また、書籍購入の割引や公開講座・フォーラム、自助グループ開催に関する情報提供等、様々な特典がございます。アパリは立ち上げて9年目に入った組織です。今後も、薬物関連問題の新たなシステムとネットワーク構築のために全力を尽くしていく所存です。アパリに関するご意見ご要望がございましたらいつでもご連絡ください。

既に会員になられている方には、継続のお願いと会費納入のご案内を別途郵送させていただきます。

【年会費】 正会員：12,000円 賛助会員：6,000円

【期間】 平成20年4月1日～平成21年3月31日まで

【郵便振込】 番号：00160-7-136870 アパリ東京総本部

アウェイクニングハウスとは振込み先が異なりますのでご注意ください。

日本ダルク 公開シンポジウム 開催!

「日本版ドラッグ・コートの提案」-新たな改革の可能性を探る-

【日時】平成20年6月13日(金)10時～16時

【場所】日暮里サニーホール(荒川区東日暮里5-50-5ビルディング内 JR日暮里駅から徒歩2分)

【シンポジスト】

荒木龍彦氏(法務省東京保護観察所次長)、石塚伸一氏(龍谷大学法務研究科教授・弁護士)

大橋哲氏(法務省矯正局成人矯正課)、海渡雄一氏(監獄人権センター事務局長・弁護士)

近藤恒夫氏(日本ダルク代表・NPO法人アパリ理事長)、椿百合子氏(青葉女子学園園長)

平井慎二氏(下総精神医療センター薬物依存研究室室長)

入場無料。申し込みは必要ありません。

主催：日本ダルク 協賛：PHP思いやり運動、川崎ダルク、NPO法人アパリ

日本ダルク アウェイクニングハウス
地元藤岡市でフォーラム開催予定!

日時：9月14日(日)
場所：藤岡市民ホール

詳しくは次号でお知らせいたします。



特定非営利活動法人
アジア太平洋地域アディクション研究所

アパリ東京本部
〒110-0015
東京都台東区東上野6-21-8
電話：03-5830-1790
FAX：03-5830-1791
Email：info@apari.jp

アパリ藤岡研究センター
(運営：日本ダルク アウェイクニングハウス)
〒375-0047
群馬県藤岡市上日野2594番地
電話：0274-28-0311
FAX：0274-28-0313

- 【入寮条件】
1、薬物依存から回復・自立しようとしている本人
2、男性(年齢制限なし)
【入寮期間】
基本的に13ヶ月
【入寮費】
月額16万円(初回17万5千円、生活保護の方も可能)



ホームページもご覧ください
<http://www.apari.jp/npo/>

発行者：近藤恒夫
編集責任者：志立玲子
平成20年5月1日発行
定価 1部 100円

<アパリの司法サポート> アパリの支援

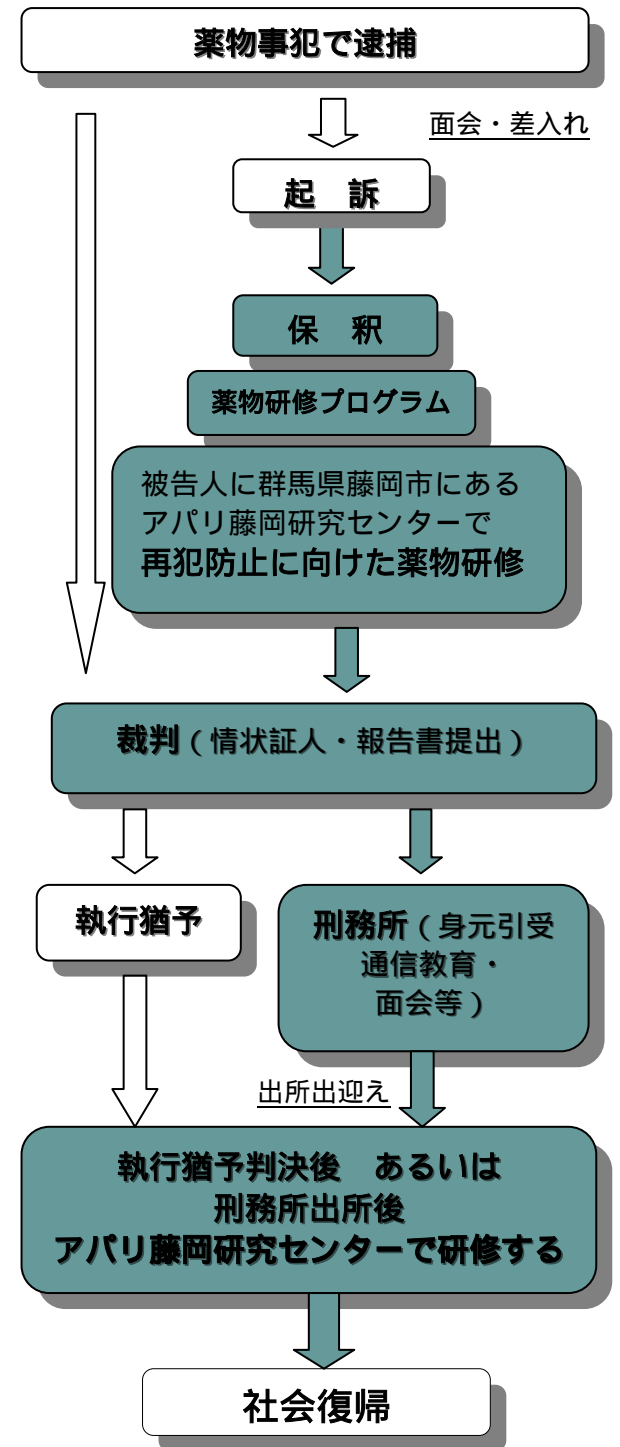
《薬物事犯で逮捕された刑事被告人に対する支援》

薬物犯罪で逮捕されたら刑務所に行くか、再犯防止に向けた何の取り組みもないまま執行猶予の判決をもらって、また薬物のある日常に戻るしかない日本において、**はじめて刑罰以外の再犯防止に向けた取り組みです。**

保釈中の刑事被告人に対する薬物研修プログラム、情状証人出廷、上申書作成、入寮契約、身元引受契約、出所出迎え、法律相談などあらゆるニーズにお応えします。なお、日本における薬物事犯の再犯率は50%ですが、アパリの司法サポートを利用された方の再犯率は**5%以下**です。最近では特に、**受刑中に身元引受契約をし、仮釈放又は満期釈放の時に**出迎えに行き、リハビリ施設に繋げるお手伝いをしています。

[費用：コーディネート料として一律20万円。但し、東京以外の地域は交通・宿泊費の実費が必要です]

【お問合せは東京本部まで】



<家族教室>

「エクステンディッド・ファミリー・クラブ」

日時	ゲストスピーカー	テーマ
5月5日(月)		「家族の否認」
5月19日(月)	高橋仁(日本ダルク) プーカー(NAMEMBER)	座談会「ダルクを卒業してから」
6月2日(月)		「依存とうつ」
6月16日(月)		「手放す」
7月7日(月)	本人とその家族	「家族の側から見た支援」

- 【対象】薬物依存症などの諸問題を抱える家族、知人、友人、援助職従事者
【日時】第1・第3月曜日18：30～20：30【場所】アパリ・クリニック上野2階
【参加費】3,000円(ご夫婦などでの参加は2名で4,000円になります)
【内容】カウンセラーの町田がファシリテーターとなり家族との分かち合いを行います。法律問題については事務局長の尾田が担当します。【お問合せは東京本部まで】

<個別相談・カウンセリング>

【対象】薬物依存症などの諸問題を抱える家族・本人など 【料金】45分 9,000円
【場所】アパリ東京本部 【カウンセラー】町田政明[元神奈川県立せりがや病院勤務、ホープビル代表、寿アルク理事] 【予約】アパリ東京本部 03-5830-1790 【注意事項】当日のキャンセルや変更の場合は全額いただきます。遅れていらした場合は時間が短くなりますのでご了承ください。